

●グローバル化時代の医療・検査事情 9

酒と心房細動



いわもと あいきち
岩本 愛吉
Aikichi IWAMOTO

I. 美酒：We live to eat (and drink)

《2009年7月ケープタウン》

2009年7月南アフリカ共和国(南ア)ケープタウンで開催された国際エイズ学会(IAS2009)に参加した。南アは初めてだったし、空港から市内のホテルまでタクシーを使った。運転手は親切な男で、「どこかに行くなら電話をくれ」と名刺をくれた。学会を主催したロビン・ウッド、リンダ・ゲイル・ベッカー夫妻(共にケープタウン大学教授)がトニー・ファウチ米国立アレルギー免疫研究所長を歓迎するためのワインパーティーに私も招待してくれた。場所がよくわからず、空港からの運転手に電話したが、用事ができたらしく結局別の運転手がやってきた。出発して間もなく辺りは暗くなってきた。運転手は路肩に車を止めて、振り向きなり後部座席の私の方に手を伸ばしてきた。「何だ?」と一瞬身を固くしたが、私の横のドアをロックした後、地図を見るためだった。「あーっ、安全なところじゃないんだ」と今更ながら心細くなった。道にも迷い、予定していた約30分の倍以上かかって会場にたどり着いた頃には、日はとつぷりと暮れていた。厳めしい鉄扉を開けてもらって取付道路に入ると、両側に並ぶ鬱蒼とした樹木の幹の太さと荘厳さに度肝を抜かれた。「あーっ、ここは古いワイナリーなんだ」。他のグループもみんな道に迷ったと言いながら、遅れてきた。ワインはすばらしかったが、遙かに望むケープタウンの夜景以外には何も見えなかった(写真1)。



写真1 ワイナリーから見たケープタウンの夜景

《2014年4月ケープタウン》

ワイナリーを見て回りたいという希望は5年後に現実となった。2014年4月2日～5日ケープタウンで第16回国際感染症学会が開催された。前回の2009年には国際エイズ学会(IAS)の理事を務めており、IASから旅費が出たが、シンガポール経由か香港経由しかケープタウンを往復するチョイスはなかった気がする。成田-シンガポール間は約7時間だが、シンガポール-ケープタウンは14時間以上のフライトで、しかもヨハネスブルグに立ち寄る。また、ながーいシンガポール-ケープタウン間を、南ア航空のエコノミークラスで過ごすこともなかなかチャレンジングだった。便座があっても無くても気にしない人がいるのか、トイレの便座が外されていたり、特に帰路は隣に巨大なアフリカ人女性がいて、太った私と二人が隣どおしで長時間過ごすにはかなり無理があった。そんな経験から、また急速に

日本発着の発着便が増加してきたエミレーツ航空に乗ってみたい気持ちもあって、今回はドバイ経由のエミレーツでケープタウンに行った。成田ードバイ間、ドバイーケープタウン間それぞれ約10時間で、ビジネスクラスでもあり快適だった。

4月2日にケープタウン国際空港に降り立った。南アフリカ共和国は2010年FIFAワールドカップを開催しており、2009年に訪問した時と比べると空港ビルが立派になっていた。市内の工事現場も少なくなり、ケープタウンにもサッカー場ができていた(写真2)。

4月3日は南ア・ダーバンでHIVの疫学や予防について研究するSalim Abdool Karim ナタール大学教授のプレナリー・セッションを聴講したり、午後HIVのセッションでタイのKiat Ruxrungtham チュラロンコン大学教授の講演を聞いた。その後Kiatと連れ立ってウォーターフロントに出かけ、シーフードを食べた。2013年頃からタイの政治が不安定化し、タクシン元首相支持の赤シャツ派と反タクシン派の黄シャツ派が国を二分し、デモを繰り返す様子が報道されていたから、Kiatからは生々しいバンコクの様子を聞いたかった。Kiatが見せてくれたスマホの写真には病院関係者と思われるデモ隊が写っていたが、何故か主たるカラーはピンクだった。黄色派がピンクに変わった?その後間もなくタイでは王国国軍がクーデターを宣言した(2014年5月22日)。4月4日はPeter Piotのプレナリー・セッションを聴講し、南アのDr. Françoise VenterとHIVセッションの座長を務めた。

4月5日に3人でケープタウンを抜け出した。目

指す先はフランシュフック(Fransch-hoek)。南アに最初に入植したのはオランダ人らしいが、何故フレンチなのだろうか?少し歴史をふり返ってみる。ケープタウンの南約50kmにある喜望峰を回ってインド航路を発見したのはポルトガル人のバスコ・ダ・ガマで、1497年のことだった。しかし、その後ケープタウンー帯に入植した最初の白人はオランダ人だった¹⁾。オランダ人の入植は、1652年にオランダ東インド会社が本国とインドの間のオランダ艦船の停留地としたことに始まる。南アがラグビーで強いのは、オランダ人がヨーロッパで一番からだが大きく、その子孫も体格に優れているから、体力がものをいうラグビーが強いのだと聞いた。フランシュフックはオランダ語で“フランス人の街角(French corner)”という意味らしく、フランスを脱出した176名のユグノー(フランスカルヴァン派プロテスタント)がオランダ政府からこの土地を与えられ、1688年に入植し開拓した。フランシュフックはケープタウンの約75km東に位置し、いわゆる安全圏の端にあたる。小さなダウンタウンのホテルは一杯で、我々は町外れの、ゲストハウス*La Cabrière*に2泊した(写真3, 4)。あるベルギー出身のオーナーが退職金を元手に約一年かけて建設し、少しずつシェイプアップしているところということだった。

宿泊先から約15分歩いてダウンタウンにある目的のレストラン、The Tasting Roomに出かけた(写真5)。アフリカ大陸で唯一人“世界のトップ50人”に入るシェフのいる店という触れ込みだ。The Tasting Roomは店の雰囲気といい、ワインといい、地元の食材をふんだんに使った料理といい、



写真2 ホテルから一望したケープタウン市内とサッカー場



写真3 *La Cabrière*



写真4 La Cabrière の朝食用テラス



写真5 フランシュフック・ダウンタウン

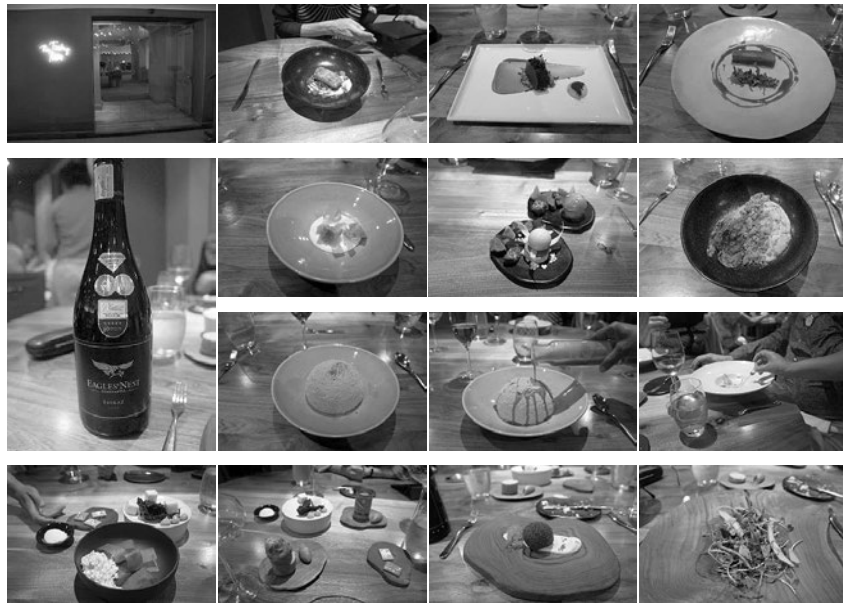


写真6 The Tasting Room のエントランス、ワイン、コース

全て花丸で堪能した(写真6)。友人曰わく“*We do not eat to live, but we live to eat and drink.*”

ケープタウンからフランシュフックへの道すがら、またフランシュフック周辺、そして大学の街ステレンボッシュ近辺にかけて、Meerlust、Delaire Graff Estate、Thelema、Chamonix、Kleine Zalzeなどのワイナリーを回った(写真7)。ググるといざれも検索のトップに出てくるワイナリーだ。ワインの値段もそれほど高くなく、もっと日本にも南アのワインが入ってくるといいのに、と思った。ワイン通の友人は、寝かせるために若いワインを安価な値段で買い、飲み頃の時期を聞いていた。持つべきものは友、2014年のケープタウン郊外はわが人生でも極めつけの珠玉の時間と味覚だった。



写真7 Thelema のワインヤード

Ⅱ. 美酒と心房細動

《2014年4月東京》

4月7日にケープタウンを出て、ドバイ経由で8日午後11時に羽田に着いた。9日には中国広東省広州市から汪建平中山大学副学長一行9人が来日した。ソメイヨシノはかなり散ってしまった後だったが、医科研の満開の八重桜が出迎えた。(写真8)

汪建平先生の公式な訪日目的は、東京大学と中山大学間の学術協定の継続に調印することだった。日中には、東大本部に松本洋一郎副学長(当時)を訪問し協定書に署名したり、文部科学省に小松親次郎研究振興局長を表敬訪問した。また東大病院を訪問し、渡邊聡明副病院長(当時)の案内で東大病院の心臓部を視察し、渡邊教授率いる大腸肛門外科の医局員と情報交換した。汪建平副学長は中山大学第六病院の前院長で、院長在職中に9階建ての老朽化した病院を、中国南部で大腸疾患の外科手術のハブとなる27階建て新病院へと再構築した辣腕院長である。東大の外科手術数や成績にも強い興味を示していた。

さて本稿の主目的である夜の部に入る。訪日団の過半数は学生で、しかも初めての日本、ということだったので、自ずと“おもてなし”に力が入った。飲み食いの話なので詳細は控えるが、当然自分で背負えるわけではないので、“困った時の先輩頼み”、母校の三重県立伊勢高等学校の先輩に全面的に支

援してもらい、四夜連チャンのどんちゃん騒ぎを取行した(写真9-12)。

4月14日、汪建平先生一行が帰国した。ケープタウンからずっと飲み会が続いてきたので少々ホッとした。診療と研究の日常生活に戻ったが、翌15日前胸部に違和感があり、脈を診ると結滞があった。「これは心房細動だな」と思われたので、翌16日医科研附属病院で心電図をとり、心房細動と確認した。決してケープタウン-東京と続いた酒で急に起こった体調の問題ではない。約半世紀続いた「ジョッキ2杯までは休肝日」の生活に、心臓が悲鳴をあげたに違いない。

《2014年4月沖縄》

以前より4月17日に沖縄で講演することを元医科研所長で沖縄科学技術大学院大学(OIST)のY教授と約束していた。心房細動は頻度の高い病気で、循環器は専門外の自分でもしばしば外来で遭遇する。「あーあ、自分の番が来たか」くらいの認識であった。前胸部に違和感はあったが、血圧の薬を飲んでいるためか頻脈にもならず、不整脈による症状は少なかった。同級生で内科のW教授に電話したが、「カテーテル・アブレーションによる根治的治療を早くやれ」と言うだけで、今どうすべきかに関して示唆は無かった。念のため、内科医局の先輩でかねてより尊敬する前虎ノ門病院院長のY先生に、心房細動を発症した由メールで報告し、沖縄に向かった。空港でY教授の出迎えを受け、1日目の講



写真8 ヤエザクラの下で汪建平先生と筆者

演先、うるま市の沖縄県立中部病院に向かった。沖縄県立中部病院では、熊本大学医学部昭和50年卒業の松本廣嗣病院長（当時）と同年代故の親近感を持って楽しく会話をさせて頂いた。また東大医学部出身の内科医K先生を紹介して頂いた。この時名刺を頂いていたのが後から役立った。その後、18時から「HIV感染症：アジアの視点」と題して講演した（写真13）。講演後、Y教授の運転で恩納村に向かい、ホテルモンテ沖繩にチェックインした。その夜は、久々に再会したY教授と泡盛で痛飲した。心房細動は持続していた。

翌18日はY教授の案内でOISTの施設を見学し、研究室をいくつか回った後、16:00-17:00「Chasing a single amino acid substitution in HIV-1 circulating among Japanese population」と題して、英語で講演した。講演後食事に行くまで少し時間があつたのでメールをチェックしたところ、Y先生から返信が届いていた。

「心房細動が2日以上持続すると血栓による塞栓症のリスクが高くなるので、すぐ薬を飲め」との指

示であった。「旅行中に脳塞栓でも起こしたら女房が怒るだろうなあ」と初めて慌てた。沖縄県立中部病院K先生の名刺を見て電話し、心房細動で受診したい旨伝えた。全国的に会社を展開するT社の社長がたまたまOISTに来ていたので、その車に乗せてもらって、沖縄県立中央病院まで高速道路で約45分の道のりを急いだ。K先生は、除細動が必用な可能性も考えて下さっていたようだが、とりあえず抗不整脈薬と抗凝固薬の処方をお願いした。診察が終わったのは、薬局が閉まるぎりぎりの時間だった。恩納村へとって返し、「とりあえず薬を始めたのだから」とY教授と再び杯を重ねた。

《沖縄の長寿の薬》

Y先生のご指示による服薬で4月20日に整脈に戻った。長くなるので酒と再発の顛末は別稿にしようと思う。ここでは一つだけ後日談を紹介する。帰京後しばらくして、松本院長から丁寧なお手紙を頂いた。要点は以下の通り。

「先日は謝礼もないのに講演ありがとう。翌日も



写真9 汪建平先生歓迎会



写真10 銀座の著名蕎麦屋での一行歓迎会



写真11 蕎麦を肴に汪建平先生と飲み交わす



写真12 表参道のしゃぶしゃぶ店での一行



写真 13 沖縄中部病院で講演する筆者

受診してくれたそうでこれまたありがとう。ついてはお礼として沖縄の長寿の薬を送ります。」

これはやばいと思ったが、2、3日して甕入りのケース（泡盛古酒）3升（5.4l）が届いた。さすがに一人で開封する元気はなく、毎年恒例の伊勢高同窓会関東支部総会に持ち込んで、皆が一日で干してしまった。

文 献

- 1) ウィキペディア：ケープ植民地
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B1%E3%83%BC%E3%83%97%E6%A4%8D%E6%B0%91%E5%9C%B0>
- 2) ウィキペディア：フランシュフック
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%82%B7%E3%83%A5%E3%83%95%E3%83%83%E3%82%AF>